

# 満州開拓団と居留日本人の悲劇の跡を巡る旅

酒井 旭

## 1. 参加の動機

今回の旅行は、戦前、小学校入学前から中学2年生まで住んでいた佳木斯の街や、昭和20年に3か月ほど勤労奉仕に行っていた弥栄村開拓団の跡地を訪ねるというので参加しましたが、内容の濃い、考えさせられることの多い“学びの旅”でした。

引き揚げ後64年間、満州時代のことは振り返らず、前を向いて歩んできた自分の考えが変わったのは、昨年末、3歳年上の姉が亡くなったことでした。姉は終戦の年の3月、佳木斯高等女学校を卒業し、そのまま佳木斯の関東軍陸軍病院の看護婦に召集され、シベリアの収容所で16歳～18歳の青春期を過ごしましたが、復員後、シベリア時代の話は一切してくれませんでした。思い出したくもない地獄の抑留生活だったことと思います。

今年の5月の佳木斯朝日在満国民学校の同窓会で姉の同級生を探し、シベリア抑留を経験した話を聞かせてほしいと訴えました。今回の旅も『嗚呼 満蒙開拓団』の映画上映会の際、佳木斯と弥栄村を巡るツアーというパンフレットが目にとまり、参加することにしました。

## 2. 弥栄村開拓団の勤労奉仕

青年男子が全員関東軍に徴用され、人手不足になった開拓団で、中学2年生のひとクラスを受け入れ、宿泊、食事の面倒をみてくれた開拓団のおばさんたちにお礼を言いたい・・・という気持ちも、今回“弥栄会”という同窓会がある事を教えてもらい、果たすことが出来そうになりました。

開拓団の人たちを含む在満民間日本人の受けた悲惨な苦しみは、遠い過去の出来事としてひっそりと、この世から消えて行こうとしています。今回の旅でこの人たちが辿った苦難の途を巡礼し、64年前のことに想いを馳せることで改めて、どのように歴史の事実を若い世代に伝えたら良いか？ 自分自身の記憶に改めるべき点はないか？ を確認する旅でもありました。

## 3. 真っ先に逃亡して行った関東軍

そのひとつに「侵攻してきたソ連軍に対する関東軍の応戦ぶり」がありました。8月9日ソ連軍の爆撃機が佳木斯に飛来したという知らせに、急ぎ佳木斯へ戻った中学2年生は関東軍の将校から“貴様たちは佳木斯市民の護衛に就け”と命じられ、三八式歩兵銃と弾薬を支給され、避難する市民の最後尾について列車を待ちました。次々に発車する列車は軍服を着た関東軍の兵士たちで満員でした。ようやく乗せてもらった列車も、動いては止まり、降ろされて、次の指令を待つ心細い逃避行でした。最優先の兵士たちの列車の行く先はソ連軍が攻めてくる方向とは反対の方向でした。珍しく一等車の客車が、空席が半分もある状態が入ってきました。避難民の団体のリーダーが乗せてもらえないか？ と交渉

している様子・・・でも入口に立っていた軍人に、アッチへ行けと怒鳴られていました。あれは 高級将校の家族たちじゃないか？ と誰かがつぶやいていました。

関東軍は民間人を見捨てて、真っ先に逃亡して行った——これが長い間 自分の頭の中に焼き付いていました。

しかし、東寧のトーチカなどを見て、最前線に配置された関東軍兵士には真面目に戦って戦死した者もいたのだ・・・と。

帰国後、引揚援護局の資料で知った数字は、在満民間人155万の中、引き揚げ前に自決、殺害、病気で死亡した者27万。うち、開拓民27万中、死亡8万。関東軍75万の中、ソ連軍と戦って戦死した数は不明ですが、交戦した部隊の人数から推定すると、1万足らず(?)。もし、75万の軍隊が8月15日まで国境線でソ連軍を食い止めていたら、彼らを南満州まで運んだ満鉄の列車で開拓民全員を避難させることができたのではないのでしょうか？

#### 4. 関東軍の匪賊討伐

昭和19年、中学生が関東軍の佳木斯師団に体験入営をした時、将校から“匪賊討伐の自慢話”を聞かされました。「日本人が匪賊に襲われたら、出撃し、犯人を捕捉できなかった、というわけにはいかないので、とにかく匪賊襲来現場の近くの部落を焼き打ちにして婦女子全員皆殺しにしたのだ——」とのこと。それが 匪賊を殲滅したということで、「懲らしめないと、奴等はずけあがるからなア、アッハッハ・・・」。

この“見せしめ”のおかげで、匪賊の襲来は確かに減っていきました。しかしこの恨みは敗戦時、まとめて報復されました。それも報復の対象は武装した関東軍へ、ではなく、トボトボと避難行を続ける民間の婦女子に向けてでした。

列車で避難した佳木斯中学生は、佳木斯とハルピンを結ぶ鉄道(佳浜線)の途中駅、綏化に停留させられ、ソ連軍の武装解除を受けました。

#### 5. 姉のシベリア抑留

ただ“方正”というところは佳木斯高等女学校の卒業生で佳木斯陸軍病院の看護婦として徴集された姉(16歳)たちが避難行の途中、ソ連軍に襲われ、同級生のひとりが拉致された場所として記憶にありました。その時の情景が、今回の旅行で知り合った打田さんから教えていただいた本『従軍看護婦たちの大東亜戦争』(祥伝社)、佳木斯第1陸軍病院勤務 日赤救護班有志 “帰ってこなかった見習い看護婦”(P279)に記されています。「一列に並んで方正の司令部目指して歩いていた時、ソ連軍の兵士の乗ったジープが襲い掛かり、一人の見習い看護婦をジープに引きずり上げ、走り去った。“婦長殿助けて!! 軍医殿 助けて!!”と、暗闇に尾を引くような悲鳴を残して・・・。」 姉の友人のその方(上田房枝さん)の消息は不明のまま、シベリア抑留から復員した姉たちが懸命になって探しても、手がかりになる情報は得られずじまいでした。青酸カリ自殺をされたのか? 残留婦人になられたのか??? もし、この上田房枝さんという方が方正地区に残留婦人としておられたか? 消息をご存じの方がおられたらご連絡ください。

## 6. 残虐非道な関東軍細菌部隊

ハルピンで細菌部隊731罪証陳列館を訪れ、残虐な生体実験の実態を示されました。ここまで鬼になれる???・・・すべての日本人が狂気になって鬼畜米英打倒、一億玉砕を叫んでいた時代とは言え、ここまで非情に人間を殺せる神経に怒りを覚えました。ガイドの馬天龍氏の説明の中に聞き流せない言葉がありました。ここ（ハルピン郊外：平房）と新京の100部隊ではペスト菌保菌ノミやチフス菌保菌シラミを大量に飼育していた・・・とのこと。

帰国後 細菌部隊のことを記述した本

『戦争と疫病－731部隊がもたらしたもの』本の友社 および

『生物戦部隊731』草の根出版会、

『老兵の告白』黒竜江出版会

を読み、本格的な細菌戦争の準備が完了し、中国西部の数か所で散布を実行していたという事実、ハルピン・新京の住民が巻き添えになることも承知の上、これら731部隊が、ソ連軍侵攻前に飼育施設を破壊し大量飼育の蚤、シラミ、ネズミを散布して逃亡していったことも判りました。

ハルピン、方正、新京の避難民収容所で大量に繁殖したシラミ、大流行した発疹チフス。開拓民や民間人の避難民で、直接、ソ連軍や地元農民の襲撃を受けて死亡した人数を上回る（少なく見積もっても1万数千人の）死亡者を出したこの伝染病と、731部隊、100部隊の行った行為との間に関連は無かった、と言えるでしょうか？

昭和20年冬、自分自身が避難途中、略奪を受け、着のみ着のままで辿りついた新京の避難民収容所で発疹チフスに感染し、40度以上の高熱に生死の境をさまよひ、一緒に伏せていた父親を亡くしただけに、衝撃的な情報でした。

細菌部隊731罪証陳列館に記されていた“生体実験で殺された人 5,000人、被害者総数 30万人”—— この中に、ペストやチフスで1945～46年に死亡した一般住民が含まれていることを知りました。

## 7. 償い

これほどの犯罪を行いながら、日本政府はこの事実を認めようとせず、被害者の遺族・子孫への賠償や、感染症流行対策、医薬品・医療の援助にも全く背を向けてきました。せめて、731部隊罪証陳列館に、日本政府として“謝罪の碑”と“犠牲者の供養塔”を建立しても良いのではないのでしょうか？

1995年の村山談話を継承すると言っている鳩山首相へ直接訴えることができれば実現するのではないのでしょうか？

## 8. 今、幸せそうな中国の人たち

それにしても 訪ねた街の活気溢れる賑わい、人々の穏やかな表情、一人っ子を大事に育てている親の愛情、旅行客が日本人と判ってからも見せてくれた笑顔・・・この国の人々は今が一番幸せなんだ——と、しみじみ感じました。関東軍が去った後も、文化大革命時代、知識人の吊し上げ、教育の停滞、公安局の監視、互いに陥れる密告制、息の詰ま

るような雰囲気能耐えて解放されたのはこの30年ほど……。ひとびとは心から今の平和の有難さを噛みしめているようでした。

## 9. 再び同じ悲劇を繰り返さないために

現在の幸せは、あの悲惨な十五年戦争と、敗戦時の悲劇を経なければ到達できなかったものでしょうか？ 日中両国で1,000万人以上の犠牲者を出したあの悲劇は避けられなかったのでしょうか？ 別の選択肢はなかったのでしょうか？ もし、それらの方策がもっとひどい結末をもたらしたのであれば、当時の判断は間違っていなかった、やむを得ざるものだったと納得出来るでしょう。しかしあの時、こうすればあのような悲劇を生ずることなく、解決できたという方策が見えてきたら、将来同じ過ちを犯さないヒントになるのではないのでしょうか？

このテーマに関心を持たれた方たちと勉強会をスタートできたらと考えながら、帰国しました。

(さかい・あさひ、昭6年大連生まれ。21年引き揚げ。カナダ McGill 大学院留学後、カナダ国立研究所での勤務を含め研究歴52年。専門：化学（高圧反応工学、高分子化学、放射性同位元素標識抗原抗体反応、生命化学）現在も国内・国際学会で研究報告継続中。